

クリシュナの脈管説

—循環と病について—

渡辺 亮（東北大学）

インド古典医学書にみられる体系化された医学・薬学（アーユルヴェーダ）では先史より蓄積された知的営為の結晶ともいえる治療がさまざまな疾患に対して行われていた。その中には血液等の「循環」を容易に想起させる治療法も散見される。

時を経て、この知的営為に根ざしたと考えられる儀礼行為が 9 世紀以降の密教の文脈に確認されることがある。サンヴァラ系という聖典の一大体系にみられる解剖生理学的な見解を具するその儀礼は、身体に及ぼす生理機能を巧みに用いることで実践をより高次なものへと昇華し、実現し難い悟りを確実なものとした。実践者がその手続きを正しく踏むならば、自ずと「完成された者（成就者）」となったのである。しばしば「天空を行く者」と表現される成就者が、その超人的な能力ばかりでなく、「病」に打ち勝つ堅固な心身を手に入れたであろうことは想像に難くない。

本発表ではサンヴァラ（宗教的な「至福」を意味する）の教えを相承した成就者で 10 世紀の半ばから終わり頃にかけて活躍したと考えられるクリシュナアーチャーリヤ（「クリシュナ」と略称する）の示す循環的实践方軌を考察する。後代のチベット人註釈家らによって「72 種の転移」（*kun tu spyod pa bdun cu rtsa gñis*）と呼称されるその実践は、身体要素の一種である<菩提心>（「脳内分泌物質」や「精液」を思わせる身体内のエッセンス）が「24 種の聖地」と対応する身体主要部位の<脈管>（身体中に存する管状の組織）を、「3 種の挙動」即ち、‘laya-’（入る）、‘bhoga-’（享受する）、‘adhikāra-’（支配する）によって巡る様子を描いた「観想法」の一である。これは当時行われていた聖地巡礼をモチーフとしたものと考えられ、実践者の身体要素に投影された尊格が体内を巡ることで各身体部位において至福を得るというプロセスを比喩的・技巧的な表現をもって説示したものである。クリシュナは、そのような身体論にもとづき、観想の中で自在に身体要素を駆使することによって人体の生命力を循環させ、本来的な自己の実現を図ろうとしたのである。

この実践方軌には従前の研究だけでは充足し得ない学術的価値が包含されていると思われる。そこで、本発表では特に課題として挙げられる 1) この実践の具体像をより明確にするための原典再考、および 2) 周辺資料に確認される実践との関わり、という点からチベット撰述文献をも考察対象に入れた検討を行ってみたいと思う。

<キーワード>：インド密教，クリシュナ，身体論